

## 谷崎潤一郎の戦後京都表象

——文化都市論と「磯田多佳女のこと」——

吉田夏美

はじめに

谷崎潤一郎は昭和二十一年三月に、疎開先の岡山県勝山町から京都市に入った。空襲で魚崎の自宅を焼かれた谷崎は、戦後一旦は住み馴れた阪神間で新しい家を探した。だが「焼跡の町ではいろいろの不便や不都合のあること」<sup>1)</sup>が分かり、京都を移住先に選んだ。かねてより親交のあった当時の京都市長・和辻春樹<sup>2)</sup>に便宜を図ってもらい、京都に転入すると、旅館への滞在と間借りを経て、同年の十一月、左京区南禅寺下河原町の二戸建てに腰を落ち着けた。<sup>3)</sup>以後谷崎は昭和三十一年十二月まで、約十年間京都で暮らした。

谷崎の文学にとって、戦後の京都との出会いはいかなる

意味を持っていたのだろうか。昭和二十年代の谷崎の歩みは、京都に移住したことで、日本の伝統文化と改めて向き合い、彼らしい芸術世界をさらに深めていったと要約されがちである。

確かに移住後の谷崎は、京都での生活や伝統芸能について、随筆の中で積極的に語るようになった。小説においても、『少将滋幹の母』(『毎日新聞』昭和二十四年十一月十六日)同二十五年二月九日)を筆頭に、複数の古典籍を自在に参照する語りを採用した。これらの作品の語り手として仮構された〈谷崎潤一郎〉のイメージは、古典に精通した老大家という、『源氏物語』の翻訳などによって形作られた作家像と矛盾しないものになっている。

だが、同時代における京都の状況と、京都の内部で行わ

れていた議論を背景に置くと、このような作家理解に安住できない側面が浮かび上がってくる。その議論とは、日本の戦後復興方針としての「文化国家」という理念と、京都という都市の関係をめぐるものである。

昭和二十年代前半の日本では、「文化国家」としての再出発というスローガンのもとで、伝統文化の美点の再定義、教育の民主化、生活の合理化といったさまざまな分野において、「文化」の語を利用した議論が盛んに行われていた。<sup>(4)</sup>とりわけ京都は、大規模な空襲を逃れた唯一の大都市として、「文化」による日本の再建をリードしようとしていた。

終戦から間もない昭和二十年十一月、「日本の諸都市に空爆が開始される時に、京都、奈良を戦目標から除外」しようとしたラングドン・ウォーナーの「献身的な努力」によって、京都と奈良は大規模な空襲を逃れたというエピソードが「朝日新聞」の記事になり、真偽が問われないまま、あたかも「伝説」のように国民の間で広がった。<sup>(5)</sup>

京都在住の政治家・文化人たちも、この進駐軍の文化財保護政策の宣伝と結びついた「伝説」を積極的に受け入れ、京都の地位向上に利用しようとした。戦前の京都は、近代化を急務とする都市／多数の文化財を保有する古都というイメージの間で葛藤し、自らの都市としての位置を模

索していた。<sup>(6)</sup>それゆえに、京都は「文化国家」というスローガンを、都市の開発を前提とする文化都市論の文脈で引き受けた。都市の発展と日本の復興のために京都の文化を利用する方法が議論され、古い文化財は観光資源とみなされた。つまりこの時代において、文化面から京都を語る行為は、政治的な色彩を帯びていたのだ。

ならば谷崎の京都表象と文化観も、当時の文化都市論との関係を踏まえて、再度検討されるべきであろう。谷崎は戦後の京都の何をいかなるスタンスで描いたのか。谷崎文学と戦後京都の関係について論じることは、戦後における谷崎文学の存在意義を再考することにもつながるだろう。

よって本稿では、戦後における谷崎の京都表象と文化観の特徴を、京都における文化都市論との関係を視野に入れて分析することで、谷崎文学にとっての京都移住の意義を問い直していく。まずは当時の京都で展開されていた文化都市論について分析する。

なお、本稿における「京都」は、現在の京都市の範囲を指すことを断っておく。

## 一 文化都市論と罹災者

谷崎が京都に入った昭和二十一年の上半期には、雑誌が

地元の出版社から次々と創刊・復刊され、文化都市論が盛り上がりはじめていた。なかでも、随筆雑誌「洛味」が注目すべき役割を果たしていた。「洛味」は昭和十年三月創刊。同十八年一月に一旦休刊し、戦後の昭和二十一年九月に復刊。翌二十二年十一月の第七輯をもって、再び休刊を余儀なくされたが、昭和二十四年十二月に再度復刊し、平成二十一年十二月まで刊行された。

「洛味」は創刊から一貫して、京都を愛する文化人・研究者らが、文芸や食の話題を通して京都の魅力を語る「趣味随筆誌」であった。それゆえに、文化をめぐる戦前・戦後の議論と誌面は常時密接に結びついていた。戦時体制が強化されるにつれ、「洛味」編集人の宮崎小次郎も、京都の伝統文化を「日本精神修養の道」とみなしたうえで、京都は「大東亜共栄圏の指導文化の根拠地」となるべきだという主張を強めていった<sup>①</sup>。

ところが戦後、先述したウォーナーの〈伝説〉によって、京都の魅力や文化を語ることが、京都の地位向上のみならず、「新日本」の建設にもつながるというパースペクティブが新たに生まれた。宮崎は復刊第一輯の「編輯後記」で「わが京都は幸ひ戦禍を免かれて健在である。数多くの尊い文化財もそのまゝ、残された。今こそ、名実共に文化日

本の中核都市・大京都の偉容がくつきりと浮び上つて来た。伝統文化を母体として、新文化の創造に、芸術文化の向上に専念することが、復刊「洛味」の使命である<sup>②</sup>と意気込みを述べていた。京都を「文化日本の中核都市」にするという宮崎の野心が、「大東亜共栄圏」から「文化国家」論に看板を掛け替えることで、より燃え立ったような観がある。

宮崎の「編輯後記」と呼応するように、「洛味」の復刊第一輯〜七輯では、当時の京都市長・和辻春樹ら三十人以上の文化人・研究者が、「文化」をキーワードにして京都を語った。これらの議論における文化の語には、ベクトルが異なる二つの意味が含まれていた。すなわち、宗教的建造物や伝統芸能のような、高尚で歴史的な価値がある人間の活動という意味と、「文化住宅」のような、近代的で実用性があるものという意味である。

このような「文化」の二重性は、行政にとつて都合の良いものであった。例えば和辻春樹は、産業・観光・文教が揃った「近代文化都市」を理想として掲げた。和辻は「洛味」誌上で、京都が仮に「日本第一の観光都市」であるとしても、「古い文化といふ事と、京の味といふこととは、今日の京都の近代文化を測る尺度にはならない」と語り、古

い文化財の存在に胡坐をかかずに、文化都市としての価値を高めるべきだと提言した。そして和辻は複数の媒体で、「市民の教養が高く生活水準が高くしかも総てが近代的」な「近代文化都市」を実現するためには、道路の拡張や住宅の改善といった、生活の「科学化合理化」を行う「大都市計画」が不可欠だと主張した。

言うまでもなく、「大都市計画」の完遂には、文化財へのアクセスや景観の向上のために、民家を含む都市の一部を破壊することが不可欠である。和辻の提言にも現れているとおり、都市の保護と破壊は、いずれも「文化」の語を用いて語ることができた。すなわち、都市の文化レベルの向上という語を切り札にすれば、伝統文化を観光資源として活かすために、市民が暮らしの中で育んできた文化を破壊する、という状況を正当化できたのだ。

ここで、公権力による都市の破壊の具体例として、京都における建物疎開に焦点を当てたい。昭和十九年七月以降、市内では空襲を見越した建物疎開が、府の主導で四回にわたって行われた。特に他都市での大空襲を受けて、急遽昭和二十年三月十八日に開始された第三次建物疎開では、軍需工場などの重要施設の近辺に加え、防空空地帯として五条通・御池通・堀川通・京都駅周辺、交通疎開空地

として京阪三条駅周辺・四条大宮交差点・国鉄梅小路駅周辺、消防空地として七本松通・智恵光院通・高辻通が指定された<sup>①</sup>。その結果、一万戸以上の建物が取り壊され、多くの市民が合理的な説明もないまま移住を余儀なくされた。

第三次までの建物疎開を経て、市が管理することになった用地のうちの半分は、戦後も市が賃借を続け、五条通の整備などの都市計画に利用された。特に道路の拡幅は、近代的な観光都市・京都の建設にあたって不可欠なものであり、そのための空き地が既に存在していることは、都市開発にとつての追い風だと捉えられたのだ。

一方で、家を撤去された人の感情のケアは不十分なままであった。日本近代都市史研究者の川口朋子は聞き取り調査等を通して、京都市における建物疎開の当事者たちが「不平等意識」を抱いていたことを明らかにし、この意識は「非疎開者との比較により強調される建物疎開事業そのものの理不尽さと、空襲被災者との比較によって生じる、被害の実態が社会的に認知されていない」という心理的葛藤に起因している<sup>②</sup>と結論付けている。

また、空襲被害が極めて少なかった京都には、他都市を焼け出された人々も大量に流入していた。市は転入に制限

を設けたが、人口増が引き起こした食糧難・住宅難は容易に解決しなかった。<sup>13)</sup>衣食住もままならない空襲被害者たちの存在は、都市にとつての課題とみなされ、文化都市・京都の新たな担い手として語られることはなかった。

つまり京都の文化都市論は、戦争によって生活を奪われなかった者たちの間だけで展開されていたといえる。とりわけ行政は、歴史遺産の伝承と生活の合理化という「文化」の二重性を都合よく使うことで、商品価値のある伝統文化のみを称揚して、都市開発計画を用意した。その結果、戦時中に失われた文化の再検討も、罹災者たちが作り出す新たな文化についての議論も後回しにされ続けた。罹災者たちには言説空間上の居場所もなかったのだ。

谷崎も家を焼かれた罹災者であった。当時の京都における、焼け残ったことで都市との紐帯感を再認識した市民たちと、空襲・建物疎開によって生活の拠点を失った者たちとの間に存在した精神的格差を視野に入れるならば、京都への移住という谷崎の選択とその結果も、もはや日本文化の再発見という文脈のみでは語れなくなるだろう。

では谷崎は自身の罹災をどう語り、自分を京都のどこに位置づけたのだろうか。次節ではこの問いを柱にして、谷崎が京都への移住について語った随筆を分析する。

## 二 「転居癖」と京都

谷崎は「潺湲亭」のことその他（『中央公論』昭和二十二年一月）で京都移住について語った。この随筆では、京都の歌人・文人墨客たちの宅趾への関心、戦時中に抱いていた京都への憧れ、自身の転居癖、京都を移住先に選んだ経緯、南禅寺と文人墨客の縁、新居「潺湲亭」への期待という順で話題が並んでいる。全編を通して、「焼かれると思つた京が焼かれずに済んだことは、家を失つた私に取つてどれ程の慰めであつたらうか」という深い安堵や、伝統文化に触れる喜びといった、前向きな感情が描かれている。

随筆内の多岐にわたる話題を繋いでいるのは、「転居癖」という表現である。谷崎は上田秋成の宅趾について触れ、「自慢ではないが私も実に転居癖があつて、その点では恐らく翁（じいちゃん）に劣らないと思ふのである」と述べる。ここで「転居癖」の語は、自身と近世の文人墨客たちとの接点を、住まいの中に見出すための糸口として機能している。

のみならず、谷崎は京都移住の理由と経緯を語るうえで、罹災体験よりも自身の「転居癖」に力点を置いている。谷崎はこれについて、「大震災とか、戦争とか、経済上の事情とか云ふ外的原因もあつたけれども、若い時には生

活に変化を与へるためとか、気分転換のためとかの理由で、好んで自ら動く傾向があつたことも事実である」と述べ、戦時中に三回疎開した理由も、「昔の癖」が出てきたからだと説明している。

この語りは、自然災害・戦争と「経済上の事情」をまとめて「外的原因」として括り、「好んで自ら動く傾向」という内的要因との二項対立に落とし込んである。そのうえで、戦中・戦後の転居を、「外的原因」による一回的な出来事というよりも、「転居癖」によって反復された出来事だという意味づけ、過去の転居との差異を限りなく小さくしようとしている。

このように「転居癖」という主体的な選択を装う表現が用いられることで、谷崎の立場も、戦災によって流れ着いた罹災者の側ではなく、京を愛する人々の側に寄せられている。つまり「潺湲亭」のことその他<sup>15</sup>は、谷崎の罹災者としての不安や妥協を後景化することで、全ての話題を京都・南禅寺への前向きな期待という共通項で繋いでいるのだ。

だが、新居への期待とは裏腹に、この随筆は谷崎が京都に骨を埋めるイメージを提示していない。かわりに随筆の末尾では、早くも以下のような予感が書かれている。

だが私は、折角中国の旧友を煩はして額まで書いて貰つたのであるから、今度こそそこへ移つたら二度と転居しないであらうか、それともやがていつもの癖を出すであらうか、と云ふ段になると自分ながら少し怪しいので、いづれそのうち我が無腸先生にお伺ひを立て、見ようか、と思つてゐる次第である。

ここで谷崎はコミカルな表現を用いつつも、「潺湲亭」ないし京都での暮らしが長続きしない可能性について言及し、自身の定住を自明視していない。

かつての谷崎は、定住への確信を語っていた。関東大震災による関西移住から約六年後、谷崎は「岡本にて」（『夕刊大阪新聞』昭和四年六月三十日）において、「岡本ではすつかり「引用者注・移転」癖が止んでしまつた」と述べ、東京には「もう永久に帰る気はない」とまで言い切っていた。住んだ年月の差はあるものの、「岡本にて」で語られた定住への確信が、「潺湲亭」のことその他<sup>15</sup>では消失していることは見逃せない。

この随筆の約二年後に書かれた「月と狂言師」（『中央公論』昭和二十四年一月）でも、「昔から京都は他国の者には住みにくい土地とされてをり、私もそれは承知の上で来たのであるが、さう云つても二年近くになるうちにはいつか町

内にも顔馴染が出来、話のうまが合ふ人などもぼつぼつ此の辺に見つかるやうになつた」と、自分は京都にとつて「他国の者」だという認識が保持されている。交友関係も「町内」あるいは「南禅寺村の住人」という極めて狭い範囲の「顔馴染」に限定する形で語られている。

谷崎が随筆の中で、余所者意識を拭うことはなかつた。移住時に作り出した文人墨客との精神的なつながりも、現実の京都との紐帯感には発展しなかつた。谷崎は震災によつて仕方なく移住した罹災者でもなければ、都市との繋がりを感じている市民でもないという、宙づりの状態に自分を置き続けたまま、昭和三十一年までの十年間を過ごしたのだ。

ではなぜ谷崎は自分と京都との間に線を引いたのだろうか。次節では谷崎の随筆における、京都の住まいの描写に着眼し、彼が直面した理想と現実の落差を明らかにする。

### 三 失われた「大友」

谷崎が京都移住後、最初に発表した随筆「磯田多佳女のこと」(「新生」昭和二十一年八月・九月)は、戦時中に亡くなった、祇園の茶屋「大友」の女将・磯田多佳を追悼するものである。「大友」は文人肌の客が集まるサロンのよう

な性格を有しており、多佳は文学に造詣が深い「文芸芸妓」として知られていた<sup>(16)</sup>。祇園を愛した歌人・吉井勇もかつての常連の一人であり、昭和三十年十一月八日には吉井の古稀を記念して、谷崎や志賀直哉らが發起人となり、「大友」の跡地に「かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる」(「酒ほがひ」昂発行所・明治四十三年九月)の歌が刻まれた歌碑が建てられた。

谷崎は明治四十五年四月～六月の京都旅行時に初めて「大友」を訪れた。『青春物語』(「中央公論」昭和七年九月～同八年三月)でも、「大友」の「白川の水が床下をちよろ／＼流れてゐた風情」や、笠屋町の宿で多佳と枕を並べて泊まつた思い出を紹介している。

ただし、祇園の一女将であつた多佳の半生には、必ずしも全国的なニュースバリューがあつたわけではない。辰野隆は「谷崎潤一郎の「磯田多佳女」に就いて」の感想を訊かれた際に、「面白かつた」と答へた<sup>(17)</sup>ものの、「然し多佳女を知らぬ一般の読者には、或はそれほど興味がないのではあるまいか、と答へた<sup>(18)</sup>」というエピソードを書いている。「大友」も大正期に改築されており、建物に文化財としての価値は無かつた。

なぜ戦後の谷崎は、「大友」と多佳の思い出から京都を語

り始めたのだろうか。随筆は多佳の死と、「あの白川の水に臨んだ」「大友」の家までが、「建物疎開のためにあとかたもなく毀ち去られた」ことを、疎開先の谷崎が手紙で知るところから始まる。翌年、京都に移住した谷崎は「ありし日の大友の座敷を偲ぶ」ために跡地を訪ねる。

谷崎は跡地に向かう途中、新橋の表通りの真ん中で、「街の有様」を観察する。「昨今の花柳界は何処も火が消えたやうなので、此のあたりもひっそりとして、一人の芸者も舞妓も通らず、絃歌の声も聞えて来ない」かわりに、「進駐軍の兵士が一人、路上で自転車の稽古をしてゐる」姿を、「子供が傍で囃し立てゝゐる」様子が谷崎の目に入る。

谷崎の観察は、祇園の変化をさりげなく示している。空襲を逃れたこともあり、祇園の外観はほとんど変わっていない。だが肝心の「花柳界」が動きを止めてしまい、もぬけの殻のようになっていいる。「聞えて来ない」という現在形が用いられることで、遊びの担い手の不在という事態が、未解決の問題であるかのように語られている。

「自転車の稽古」をする「進駐軍の兵士」と「子供」の描写は、本来の主役である「芸者」や「舞妓」の不在を際立たせ、街から風情が失われていることを表現している。谷崎は花街には不釣り合いな、客でも遊びの担い手でもな

い存在を前景化することで、新橋が張りぼてのようになっている現状を、読者と共有しようとしていたといえる。

再び歩き出した谷崎が、表通りから「大友」があった「露地の奥」に入ると、以下のような光景が広がっていた。

以前は表通りから覗くと、露地の奥が暗く見えたのに、今はほかつと穴があいたやうに明るくなつてゐて、取り除かれた家のあとが蔬菜畑に化してをり、「中略」実は私は、家が潰された、けなので空爆に遭つたのとは違ふから、少しは思ひ出の種になるやうなものが残つてゐるさうに考へてゐたのであるが、かう云ふ風に完全に掘り返されてしまつたのでは、何一つ残る訳はない。「中略」昔を語るものと云つては、畑の向うを流れて行く白川と、その涼々たる水音ばかりである。

ここでは、花街の外形だけは保たれていた「表」に対して、人目につかない「露地の奥」においては、戦争の無残な傷跡が剥き出しのまま放置されている様子が描かれている。

「大友」近辺の建物が撤去されたのは、昭和二十年三月の第三次建物疎開の時であった。疎開跡の光景は、都市の防空という一時の切実な問題のために、犠牲を受け入れな

ければならなかった花街が、取り返しのつかない打撃を受けたことを物語っているといえる。のみならず、疎開跡の「蔬菜畑」への変貌は、この場所を愛した人々の思い出さえも、食料不足への対処という戦後の現実に上書きされてしまったことを象徴している。

この随筆では、「表」から「露地の奥」に入り込むという、語り手・谷崎の動きにあわせて、「文化都市」というスローガンの裏側も暴かれていた。谷崎は「大友」の思い出を辿ろうとした結果、観光資源になりうる高尚な文化だけを持つはやし、花街が受けた打撃からは目を背け続けているという、非戦災都市・文化都市京都の裏面を目の当たりにしたのだ。

ならば、谷崎に在りし日の思い出を書き留めさせた「大友」とは、彼にとつていかなる場であったのだろうか。谷崎は随筆の中で、「大友」を含む新橋の風情、居住空間としての「大友」、そして「大友」に住まう多佳の人柄という三点に着目している。

まずは新橋についての記述を見てみよう。谷崎は祇園新橋エリアの「水と人家」とが「親しみ合つてゐる」情趣に強い愛着を持っていた。谷崎は「此の白川と云ふ川は、歴史や古典文学にも出て来る名高い川であるが、此の辺で幅

五間ぐらゐ、深さ三四尺のさ、やかな流れで、これが斯う云ふ人家の櫛比するせ、こましい街中に、暗渠にもされずに残つてゐるのは、矢張京都なればこそであらう」と語り、「歴史や古典文学」にも出てくる川が、近代の「街」と暮らしにも調和している様を高く評価している。

白川は左京区・東山区を流れる全長九・三キロの川であり、南禅寺から祇園に至る手前、岡崎公園の近辺で、明治二十三年に完成した琵琶湖疏水によって分断されている。土木計画学研究者の田中尚人・川崎雅史は、疏水による白川分断がもたらしたメリットに着目し、「白川の水位安定が当地区「引用者注・祇園白川地区」の京都らしい景観の継承を可能とし、インフラストラクチャーとしての水辺が都市の骨格として機能してきた」<sup>(18)</sup>ことを明らかにしている。新橋の「水と人家」の交わりは、近代の都市計画にも支えられていた。

この新橋の「水と人家」の幸福な関係を堪能できた場所が、谷崎にとつての「大友」であった。谷崎は随筆の中で、多佳が「一日の営みを終へて自分の部屋としまつてゐる三畳に這入り、床下を流れるせ、らぎの音を聞きながら枕に就くと、その日の労苦がきれいに洗ひ去られ、頭の中のくしやく／＼が一遍にすうつと忘れさられて安らかに眠る

ことが出来ると、いつもさう云つてゐたと云ふ」エピソードを紹介している。

「せ、らぎの音」に着目する語りからは、穏やかな水音と、その音が聞き取れるほどの閑寂さへの憧れが読み取れる。谷崎の随筆における「白川」は、いつでも「歴史や古典文学」の時代を彷彿とさせる音を聞かせてくれ、人々を伝統美の世界に誘ってくれる風物だといえる。白川の水音を聞きながら、「部屋」で「安らかに眠」ったという多佳の姿こそが、谷崎にとつて、京都の伝統に包まれながら暮らす幸福の象徴であった。

では、谷崎から見た多佳はいかなる人物であったのか。谷崎は彼女の「才気が生きく」と表面に出て輝やいてゐる「眼」に魅力を感じていた。そして「多佳女の文学上のたしなみは、昔の遊女が和歌俳諧の道を心得てゐた、あの伝統を引くもので、「中略」京都の花街には古くからある型の一つなのである」と述べている。ここで谷崎が学問としての「文学」ではなく、技芸を極めてゆく「道」としての「文学」を高く評価していることは明白である。

多佳は花街の「古くからある型」を正しく継承した存在であった。「大友」に文人墨客たちが集まった理由も、「水と人家」が親しみあう、京都らしい風情がある空間で、多

佳を通して伝統的な「文学」の「道」に触れることができただからだと言えよう。

先にも触れたが、「大友」の建物自体は大正期に改築されている。だが谷崎は「昔の三疊の方がよかつた」と言いつつも、話題を明治時代に限定せず、改築後の建物も惜しんでいる。このことから、谷崎は「大友」の物件としての古さよりも、「水と人家」が親しみあう情景と、その街の「古くからある型」を体現する人間が手を取り合つて作り出した、京都の伝統が演じられる場として相応しい環境に価値を見出していたことがわかる。換言すれば「大友」とは、伝統は暮らしから分離して保存されるものではなく、それに相応しい住まいにおいて継承されるものであることを示す場であったのだ。

ここまでの論を踏まえると、谷崎にとつての「大友」は、人柄・家屋・風土の三つが調和して生まれた、京都の住まいのアイデアであつたといえる。だからこそ谷崎は、失われた「大友」の記念碑を言葉で打ち立てるために、「磯田多佳女のこと」を書いたのだ。

このように「大友」の価値を考えたとき、新居に対する谷崎の期待にも、別の側面から光を当てることができる。ここで再び「潺湲亭」のことその他」を参照しよう。谷

崎は後に「潺湲亭」と名付ける家を見学した時に、「うしろに白川が流れてゐ、一番奥の八畳の間は水に沿うて建てられてゐて、窓の下をゆくせゝらぎの音がすわつてゐてもしめやかに聞えた」ために、「往年の祇園の大夫の座敷のことを想ひ出し」た。そして「お多佳さんに「此処にお住みなさい」とさゝやかれてゐるやうな気が」して購入を決めたと述べている。ここでは「大夫」と「潺湲亭」が、「白川」を媒介にして結び付けられている。

河野仁昭は「谷崎は知ってか知らずか、白川は琵琶湖疏水によって断ち切られていて、裏の水がそのまま新橋へ流れているわけではないことには触れていない」ことを指摘し、「一戸の住まいを得たことのしみじみとした喜びの表現には、もちろんそのようなことには触れないほうがよい」と谷崎が判断した可能性について述べている。

谷崎は他の箇所でもインクラインに言及しており、祇園と南禅寺の間で白川が分断されているからこそ、京都らしい情景が成立していることを承知していた可能性は高い。だが、谷崎にとつては、事実はどうあれ、概念の上で「大友」と「潺湲亭」を繋ぐことが重要であった。なぜならば、京都の伝統を引き継ぎ、それについて語る資格を自らに付与するためには、住まいのアイデアとしての「大友」と

の繋がりが不可欠であったからである。

谷崎にとつて京都の伝統とは、人柄・家屋・風土が調和した「大友」のような住まいを通して継承されるものであった。それゆえに谷崎は、非戦災都市というスローガンに安住している市民の群れには加わらず、現実の京都では戦争遂行のために破壊された、京都における風情ある住まいのアイデアの継承者として振舞おうとし続けたといえるだろう。

京都の市民にも罹災者にも馴染まないまま、伝統を継承しようという試みは、谷崎が京都を去つてから、義妹の養子の妻であり、日本画家・橋本閔雪を祖父に持つ渡辺千萬子を媒介とすることで決着をみる。熱海から春の京都への「旅」の感想を綴つた随筆「老後の春」(『中央公論』昭和三十三年七月)には、千萬子の娘・たをりが、巧みな京言葉を使う様子に谷崎が驚く場面があり、閔雪の一族と京都の繋がりの深さが強調されている。

随筆の後半では、谷崎が閔雪の十三回忌法要に、縁者として参列したことが書かれる<sup>20</sup>。閔雪は「住居を建てることも、庭を造つてみることも、みな一如不二の仕事」と考え、「一管の筆の力で多くの古美術古玩を蒐め、壮大な邸宅庭園を築き得た」人として語られる。そして谷崎は「多く

の建物が今も子孫の手で守られ」ていることに感心する。

関雪の縁者として、彼の「邸宅」を語ることは、自身をその住まいの守り手の一人として定義することと同義であろう。そして関雪が愛した「白沙村荘」も、白川の東に位置していた。谷崎は「老後の春」に至り、京都に住むという行為ではなく、京都の住まいを継承する一族との縁を根拠にして、京都の文人墨客との繋がりを完成させたのだ。

ではこのような、住まいのアイデアの継承者というスタンスは、京都時代の谷崎に何をもたらしたのだろうか。次節では谷崎のスタンスと、当時の京都で展開されていた文化都市論の関係を明らかにする。

#### 四 谷崎と文化都市論

谷崎の移住は京都の文化人たちから歓迎され、谷崎自身も彼らに歩み寄る姿勢を見せた。谷崎は食事会や座談会に参加し、京都の「国際女性社」から発行された新興雑誌「国際女性」（昭和二十一年七月〜二十二年十月）の顧問にも就任した。この雑誌は京都の婦人運動の動向のみならず、日本画家・河合健二の「京情緒雑感」（昭和二十二年一月）のような、京都の文化について語る随筆も掲載しており、まさに文化都市論の一端を担っていた。

石川巧は、国際女性社がGHQの支援を受けていたことを踏まえ、谷崎の顧問就任には、「GHQが後援する雑誌に協力すれば検閲が緩くなるかもしれないし、自作を発表する機会も増える。また、雑誌の顧問という位置づけは、決してGHQに阿っているようにみえないため、読者に対して占領政策に迎合したという印象を与えることもない。」<sup>21)</sup>という打算が働いていた可能性を指摘している。

とはいえ、結果として谷崎も、京都の文化都市論のネットワークに組み込まれていったことは確かである。知名度が高く、日本文化への造詣も深い谷崎には、京都こそが日本文化の中心だと太鼓判を押し、文化都市論を発展させる役割が期待されていたと考えられる。

では、谷崎自身は京都の文化をどのように語ったのだろうか。実は戦後の谷崎が「文化」の語を用いた回数は極めて少ない。数少ない用例から、義太夫を取り上げた随筆「所謂痴呆の芸術について」（『新文学』昭和二十三年八月・十月）における、「文化」の「宣伝」への抵抗感を示した一節を取り上げたい。谷崎は「近時は国際文化振興会のやうなものが出て、我国独得の文化なるものを頻りに海外に宣伝するかと思へば、今度はそれが「世界的」に有名になつたかの如く国内に云ひ触らしたりすることが流行」ってい

るが、「どうか歌舞伎や文楽などは、間違つても「世界的」なんぞになつて貰ひたくない。それよりわれ／＼日本人だけで、つ／＼まじやかにしんみりと享樂したい」と述べた。

谷崎はここで、「歌舞伎や文楽」への愛着を示しつつ、見境なく「文化」を「宣伝」するような態度への抵抗感を表明している。のみならず、「文化なるもの」という皮肉で回りくどい表現を踏まえると、当時の「文化」の用法にも疑義を呈しているといえる。

谷崎は戦前から一貫して、文化の「宣伝」を否定的に捉えていた。<sup>(2)</sup>例えば「饒舌録」〔改造〕昭和二年二月～十二月、「大調和」昭和二年十月)では、イタリアの在留邦人による協会が、谷崎の戯曲「恐怖時代」を翻訳して上演しようとしたことを踏まえて、「ぜんたい文化と云ふものを商品扱ひにして、出先きの支店で宣伝すると云ふ考へからして間違つてゐる」と述べ、「文化」の安易な「商品」化を齒切れのよい表現で批判していた。とりわけ文学においては「實際日本の国へ来て、親しく風俗習慣を見、原語で読んで貰ふことが理想だと谷崎は述べており、土地と文化を強く結びつけて考えていることがわかる。

ただし、「饒舌録」と「所謂痴呆の芸術について」の表現を比較すると、戦後に「文化」の「商品」化はますます盛

んになったにもかかわらず、谷崎の反応は明確な批判から、「世界的」なんぞになつて貰ひたくない」といった、羞恥と抵抗感の表明にシフトしていることもわかる。彼は文化都市論への参加を期待されながらも、「文化」の語の使用自体を回避し、議論に対しては局外者として振舞おうとしていた。

ならばなぜ、谷崎はこのような態度を取つたのだろうか。ここで、谷崎が例外的に「文化」について語つた資料として、雑誌「洛味」の「新日本の黎明を語る——座談会——」<sup>(3)</sup>を取り上げる。この座談会には谷崎と新村出・川田順が参加しており、洛味社によって「文化日本の建設」や「新日本文化の姿」を語るといふテーマが設定されていた。

座談会ではまず新村出が「私は文化を高級の文化と一般的な文化と両方に分けて考へて居る」と述べ、従来のように「高級の文化を奨励するより」も、「普及性のある低い級の文化の向上を図る」ことで、「上下相和した文化の普及」を狙うべきだと主張している。新村の区分も、芸術作品のような「高級の文化」と、生活の中の利便性を指す「一般的な文化」という、当時一般的だった「文化」の二重の意味に即したものであった。

だが、谷崎は新村の区分をなぞりつつも、「高級の文化」

の特権化を拒もうとする。谷崎は「文化的教育を博く深く、高いものと低いものが隔絶することなく、高い処のものが高い処にだん／＼及ぶやうにもつて行かねばならぬと思ふのです。つまり老若男女上下相合した文化の総和といふものを進めなければ、本当の文化の向上にはならぬ」と主張する。

二人の主張を比較すると、新村は庶民の生活と「高級の文化」を截然と切り分けたが、谷崎は徹底して「高級の文化」を庶民の生活に流し込もうとしていたといえる。新村のいう「上下相和した文化の普及」とは、庶民の生活水準を向上させることで、「高級」と「低級」をあわせた文化の平均値を改善するという発想である。つまり新村は、庶民が「高級の文化」の担い手になれるとは考えていない。一方の谷崎は、生活の中で享受できる文化の「総和」を豊かにすべきだと考えており、庶民も「高級の文化」の潜在的な担い手であると捉え、彼らを巻き込んでいくための「文化的教育」を求めている。

過去の「饒舌録」における発言もあわせて考えると、谷崎は文化の安易な商品化を拒み、日常生活の中に伝統文化を溶け込ませるといふ発想を一貫して保持していたといえる。前節でみた「大友」を理想とする態度は、文化論の場

でも發揮されていたのだ。

谷崎はこのような立場をより強く打ち出し、京都を愛するがゆえに文化都市論を指導するという態度をとることもできたはずである。にもかかわらず、谷崎は座談会を通して、自分の「結論」を語るだけにとどめた。自身が文化論の権威になることを拒むような谷崎の発言からは、行政にとって都合よく用いられる「文化」という流行語に対する不信感と、「高級の文化」を生活から切り離して保存することへの抵抗感を読み取ることができる。

つまり谷崎は、権威ある人物による啓蒙や、公権力による商品化を安易に肯定する文化論と袂を分かつべく、京都への強い愛着を持つ局外者という位置に留まつたと考えられる。谷崎は流行語としての「文化」に背を向けることで、自分の言葉が京都の伝統を「宣伝」してしまわないように振舞い、文化都市論の空疎さに反発し続けたのだ。

ならば局外者の位置を利用して、流行語としての「文化」に背を向け続けた谷崎は、戦後の京都から何を吸い上げたのだろうか。そして、戦後の京都は谷崎の文学に何をもたらしたのだろうか。次節では谷崎文学にとっての京都移住の意義を明らかにする。

## 五 戦後社会を描く

谷崎は昭和三十一年十二月に京都の家を引き払い、熱海へと拠点を移した。谷崎はこの年の初めから、『鍵』（中央公論）昭和三十一年一月、五月（十二月）・『鴨東綺譚』（週刊新潮）昭和三十一年二月十九日（三月二十五日・未完）と、戦後の京都を舞台とした小説を立て続けに発表した。

浅見淵は「潺湲亭」のことその他」の発表時、「まことに長閑な文章」の「裏側」に、「敗戦による現実に対しての厭離感」や「現実逃避」があると述べ、「それが激しく波打つてゐるため、表面長閑なその文章も或る切なさを生んで」いると評した。

だが谷崎はしたたかに、（現実）の京都も小説の題材としてストックしていた。『鴨東綺譚』は、谷崎をモデルとした小説家・乾を視点人物に据え、京都の旧家出身のヒロイン・疋田奈々子を通して、戦後京都のカオスと封建的な雰囲気への対立を描いている。この小説では奈々子の登場に先立ち、「当時は岡崎の美術館にも公会堂にもアメリカ兵が進駐してゐたので、何か、不正物資の運び出しか、女出入りか、さう云ふ事件で一味の者が深夜ひそかに動いてゐるらしく、今に何処か、らけた、ましい銃声が聞えて来さうな

けはひがした」という描写が配置され、昭和二十一年頃の京都の頹廢的な側面が紹介される。

奈々子は「悪徳、乱倫、廃類のありとあらゆる行動の体験者」を自称し、娘がいながらも多数の男と関係を持つ。彼女は働きのない夫と離婚し、中国人の情人・董と結託してPXの物品を横流ししたり、外国製品のブローカーをしたりして生計を立てる。物資をめぐる戦後の混乱が、「故橋本関雪の白沙村荘のうしろの方」に住む「お嬢さん」育ちの奈々子にも、淫蕩生活と娘たちの養育を支える「商売」を可能にしていた。

だが、奈々子の行動は、性の解放といった文脈では語られない。むしろ奈々子は周囲の噂に耐えかね「生れ故郷の人々が私を爪弾きするのだから、私も故郷には住んでやらない」と啖呵を切り、拠点を東京・吉祥寺に移してしまう。奈々子は戦後京都のカオスを、自身の強烈なエネルギーを支える場として利用していた。ならば奈々子の東京への脱出は、都市の内部に生まれたカオスが持つ可能性を、伝統と封建的な価値観に反するという理由だけで、いとも簡単に排斥してしまう京都という都市のありさまを象徴していたと解釈できる。

終戦から十年が経過してもなお、谷崎には戦後期の京都

の caos を言葉にするモチベーションが存在していた。『鴨東綺譚』の詳細な描写を踏まえるならば、むしろ谷崎はプレス・コードに妨げられないよう、書くべき内容を温存していたと考えられる。谷崎は戦前と戦後の間に横たわる断絶を見据えたうえで、旧来の価値観を批判し、「非戦災都市」という空疎なスローガンを撃つ力を持つ場として、京都の caos を評価していたといえよう。

谷崎は戦後の京都において、伝統文化のみならず、伝統を都合よく利用することだけを考える文化都市論の浅薄さをも発見した。そして文化都市論の欺瞞に直面した結果、「現実」の戦後社会と向き合うために、伝統の裏にある caos を描くという発想に至ったのだ。

昭和三十一年以降の谷崎は、溜め込んだものを一気に放出するように、都市の caos と封建的なモラルの崩壊という、戦後ならではの主題を扱うようになる。『鴨東綺譚』は中絶するが、caos の描写は、神戸の闇市で暮らす被爆者を取り上げた『残虐記』（「婦人公論」昭和三十三年二月、十一月・未完）に、封建的なモラルの崩壊は『鍵』に引き継がれた。

これらの主題は全て、都市の復興といった前向きな物語からは取りこぼされるものであった。ならば谷崎文学にと

つての戦後京都とは、復興をめぐる浅薄な言説を乗り越えるために、伝統の陰に潜む caos と向き合うという発想を、谷崎の作品の地下水脈として用意した場所であったといえよう。経済白書に「もはや「戦後」ではない」のフレーズが登場したのも、昭和三十一年の七月である。復興の終わりが人々に意識され、戦後が過去になろうとした瞬間こそが、谷崎文学にとっての〈戦後〉の幕開けであったのだ。

以上、本稿では戦後京都における文化都市論の展開を踏まえたうえで、谷崎文学と戦後京都の関係を明らかにした。戦後の京都では、焼け残った文化資源を利用する方法が盛んに議論され、破壊を伴う都市開発も「文化」の語のもとで正当化されていた。

だが、戦後の谷崎は、建物疎開で撤去された「大友」の跡地を目にしたことで、商品価値のある文化だけを称揚する文化都市論の浅薄な裏面に触れてしまい、流行語としての「文化」に背を向けることを選んだ。

谷崎文学における京都移住の収穫は、京都の住まいのイデアとして「大友」の思い出を書きとどめたこと、そして戦後十年間の日本が「文化」の語を利用して前向きな言説から疎外してきた諸問題を、皆が忘れ去ろうとしていた夕

イメージで突き付ける力を、作家の中に蓄えさせていたこととにあった。谷崎を流行語としての「文化」に抵抗した作家として捉えることで、戦後の谷崎作品の読みにも、新たな視点が与えられるだろう。

【注】

- (1) 谷崎潤一郎「潺湲亭」のことその他」〔中央公論〕昭和二十二年一月
- (2) 和辻が京都市長を務めた期間は、昭和二十一年三月～十一月。哲学者・和辻哲郎は従兄。
- (3) 昭和二十四年四月には、同じ左京区の下鴨泉川町（後の潺湲亭）に転居している。下鴨への移住後、谷崎は南禅寺の家を「前の潺湲亭」と呼んだ。
- (4) 例えば森戸辰男の「文化国家論」〔中央公論〕昭和二十一年四月）は、「文化国家」を「文化が一切の国家的・国民的生活部面の上に立つ最高の価値として」、「これらすべてを体系づけ、運営する原動力をなす」国家だと定義し、「文化」の語の射程範囲を広げていた。
- (5) 「京都・奈良無疵の裏／作戦 国境も越えて「人類の宝」を守る 米軍の陰に日本美術通」〔朝日新聞〕昭和二十年十一月十一日）。一方で、日本史研究者の吉田守男は『京都に

原爆を投下せよ——ウォーナー伝説の真実——』（角川書店・平成七年七月）等の著書のなかで、この〈伝説〉生成のプロセスを明らかにしたうえで、京都の空襲が小規模なものに留まっていた理由は、京都が原爆の目標地であったからだと説明している。

- (6) 伊従勉らの「近代京都研究会」は、「かつてのみやこととしての文化の長い伝統と、近現代の一地方都市という社会・経済的現実との相克が、近代京都の歴史を織りなしてきた縦糸と横糸と考え、伝統と現実がずれた都市性格をいかに調整するかが明治以来現在までの課題だった」都市として京都を理解している。（伊従勉「古都のイメージと地方都市の現実」〔丸山宏・伊従勉・高木博志編』みやこの近代』思文閣出版・平成二十年三月）
- (7) 宮崎小次郎「編人輯語」〔洛味〕昭和十八年一月）
- (8) 宮崎生「編輯後記」〔洛味〕昭和二十一年九月）
- (9) 和辻春樹「京都と文化」〔洛味〕昭和二十一年九月）
- (10) 和辻春樹『市政随感』（関書院・昭和二十三年六月）
- (11) 入山洋子「京都における建物強制疎開について」〔京都市政史編さん通信〕平成十四年十二月）
- (12) 川口朋子「建物疎開の戦後処理——都市空間・都市意識への影響」〔建物疎開と都市防空——「非戦災都市」京都の

- 戦中・戦後——』京都大学学術出版会・平成二十六年三月)
- (13) 昭和二十一年が食糧難・住宅難のピークであり、地元紙でも連日報道されていた。
- (14) ここでは上田秋成のこと。
- (15) 引用は初刊本(『谷崎潤一郎全集 第十二巻』改造社・昭和六年十月)に拠った。
- (16) 杉田博明『祇園の女——文芸芸妓磯田多佳——』(新潮社・平成三年一月)
- (17) 辰野隆「旧友谷崎(細雪、蘆刈、春琴抄など)」(『饗宴』昭和二十二年六月)
- (18) 田中尚人・川崎雅史「祇園白川地区における都市形成と白川・琵琶湖疏水の役割に関する史的研究」(『土木学会論文集』平成十三年七月)
- (19) 河野仁昭(文)・渡部巖(写真)『新撰京の魅力 谷崎潤一郎の京都を歩く』(淡交社・平成十七年十月)
- (20) 河野龍也「書誌解題 谷崎潤一郎自筆「老後の春」について」(『実践女子大学文芸資料研究所 別冊年報』平成二十六年三月)は、谷崎の京都旅行を「京と己との紐帯を千萬子に見出す旅でもあった」と定義している。
- (21) 石川巧『幻の雑誌が語る戦争——『月刊朝日』『国際女性』『新生活』『想苑』——』(青土社・平成三十年一月)
- (22) 西村将洋『谷崎潤一郎の世界史——『陰翳礼讃』と20世紀文化交流——』(勉強出版・令和五年二月)は、文化の宣伝に対する谷崎の批判的態度について、詳細に分析している。
- (23) 新村出・川田順・谷崎潤一郎「新日本の黎明を語る——座談会——」(『洛味』昭和二十一年十月)
- (24) 浅見淵「文藝時評」(『風雪』昭和二十二年四月)
- (25) 経済企画庁編『年次経済報告 昭和三二年度』(経済企画庁・昭和三十一年七月)
- 付記 本稿における谷崎潤一郎のテキストの引用は、「岡本にて」のみ初刊本、他は全て初出に拠った。適宜旧字を新字に改め、ルビを省略した。
- 本稿はJSPS科研費JP23K18643の助成を受けたものである。